文化的再生産とライフスタイル

白 倉 幸 男*

Cltural Reproduction and Lifestyle

Yukio SHIRAKURA

This study examines the relationship between cultural reproduction and lifestyle in the social stratification process in Japan. The application of LISREL models to 1995 SSM data shows two main routes of cultural reproduction. First, respondents' class of origin determines inherited cultural capital. Then, the inherited cultural capital affects lifestyle and high cultural activities. This process concerns habitus and cultural transmission by the family. Second, class of origin influences educational achievement, which influences destination. Then, destination determines high cultural activities. Also, the second route shows the cultural transmission by school and class conditions.

The two main routes of cultural reproduction, family route and status attainment route, are affected by each other; however, substantive differences in the cultural reproduction process exist between men and women: (1) Women's class of origin has a positive effect on destination directly in contrast to men. (2) Women's destination influences their lifestyle directly, unlike men. (3) Men's inherited cultural capital affects both educational achievement and destination, but that of women affects educational achievement only. (4) For women, status attainment by marriage is an important life event, because lifestyle is influenced by destination. (5) Women's origin has a direct effect on destination. These findings also support our two main routes-model of cultural reproduction and lifestyle.

1. 本研究の目的

社会階層と階層文化、ライフスタイルとの関わりについては、その因果の方向によって異なる2つの仮説がある。第一に、社会階層的要因によってライフスタイルは規定され、選択されてくるといふ説である。これに対して、第二の説は、社会階層上での上昇移動などを目的として意図的にライフスタイルが選択されるのだという仮説である。

この二つの説に加えて、社会階層以外の様々な機会構造 (opportunity structures) によって、ライフチャンス、ライフスタイルが規定される、という第三の説

も存在する。本論文では、主に第一の仮説をとりあげ、さらに第二、第三の仮説をも取り上げることによって、ライフスタイルが階層構造のなかで、文化的再生産とどのような関係にあるかを明らかにする。ここで、文化的再生産のモデルについてはすでに片岡(1992)がある。したがって、本稿ではこれを拡張し、文化的再生産におけるライフスタイルの位置を明らかにする。

ここで少し長くなるが、Giddens のライフスタイルについての主な部分の説明をまとめて紹介しておこう (Giddens, 1991)。本稿でとりあげるライフスタイル概念も、このような文脈の中ではじめて意義をもつからである。

- (1) 近代社会では、人々は複雑で多様な選択に直面することになる。したがって、ライフスタイルは、複数の選択肢からの選択を意味する。
- (2) ライフスタイルは、自己アイデンティティと関連をもつ。

* 連絡先氏名: 白倉幸男

郵便宛先: 〒565 大阪府吹田市山田丘1-2

大阪大学人間科学部 (Faculty of Human Sciences, Osaka University)

E-mail: sirakura@hus.osaka-u.ac.jp

- (3) 衣食, 仕事の仕方, つきあい方などはルーチン化した選択のようでも, 自己アイデンティティが流動的性質ゆえに, 変化する。
- (4) 脱伝統的な場におけるほど, ライフスタイルは, 自己アイデンティティの核心に関わる。
- (5) ライフスタイルはライフチャンスによって規定される。
- (6) ライフスタイルには, 習慣や志向のクラスターが含まれ, 多少とも秩序あるパターンでオプションを結びつけるある種の統一性がある。
- (7) ライフスタイルの選択/創造は, 集団圧力, 役割の可視性, 社会経済的状況に左右される。
- (8) ライフスタイルは, 限定的な行為環境 (specific milieu of action) で生じる。これらの個々の環境, つまり, ある個人の全体的活動の時間-空間でのスライスをライフスタイル・セクター (lifestyle sectors) とよぶ。これには, 週末の過ごし方, 友人交際, 結婚なども含まれる。
- (9) 代替的なライフスタイルが選択できる時には, 戦略的なライフ・プランが可能になる。

本稿でもこれらのライフスタイルの諸側面を念頭におきながら文化的再生産との関係を解明して行く。そして, 文化的再生産における伝達されるものは何か。また, その仕組みはどのようになっているかを実証的に示すのが本研究の課題である。

2. データと方法

データとして, 1995年10月から11月にかけて行われた社会階層と社会移動全国調査 (SSM 全国調査) のA票を用いた。そして, 男性と女性とにわけて分析することにした。これまでの研究においても男性と女性とでは異なるメカニズムの存在が示されているからである (DiMaggio, 1982; 片岡, 1992, 1996a, b)。また, ライフスタイルでは, 男性と女性は, さまざまな消費行動において異なることが示されてきたからである。分析方法に関しては, 後の節の LISREL による分析では変数群に対してリストワイズな欠損値処理を行い, 欠損値になんらかの数値を代入する方法 (たとえば, 同じ非欠損の変数群の平均値を代入する方法) などは, 今回は採用していない。また, 順序変数に対しては, 多分相関, 多列相関などの前処理を行っている²⁾。

3. 変数および測定

ここでは, 本分析で用いる変数について説明する。出身階層については, 男女ともに, 父親の教育年数, 父親の主な職業威信, 母親の教育年数で測定している。幼少時文化資本に関しては, 「子供の頃, 家族の誰かがあなたに本を読んでもらったか」, 「小学生の頃, 家でクラシック音楽のレコードをきいたり, 家族とクラシック音楽のコンサートに行ったことがありましたか」, 「小学生の頃, 家族につれられて美術展や博物館に行ったことがありましたか」の3つの質問項目で測定している (片岡, 1992)。

女性の到達階層を表すのに, 有配偶者の女性については, 夫の職業威信, 夫の年収, 家庭財産 (調査で尋ねた14項目の財に関して, 所有しているものを1, していないものを0とした上での総和) で測定した。各財は, カラーテレビ, ビデオデッキ, クーラー・エアコン, 電子レンジ, 食器洗い器, パソコン・ワープロ, FAX, 乗用車, ピアノ, 応接セット, スポーツ会員券, 別荘, 株券, または債券, 美術品・骨董品である。

また, 現在有配偶でない女性については, 本人の職業威信, 収入, 家庭財産で測定している。これは, 直井の女性の地位モデルという点からみれば, 有配偶者の女性に関しては, 夫の地位の「借用モデル」, 有配偶でない女性に関しては, 「独立モデル」を採用していることに他ならない。これを, 「地位分有モデル」とよぶ (直井, 1989)。したがって, 女性の到達階層に関しては, 地位分有モデルを用いている。

男性は, 現職の職業威信, 年収, 家庭財産, 仕事での自律度 (自分で仕事を決めることができる) をもって, 到達階層を測定している。自律度を用いたのは, 広い意味での地位の指標となるからである。さらに, ライフチャンスは職業上の地位によって規定される可能性が高い。すなわち, ここでは仕事での自律度によって, どの程度ライフスタイルが規定されるかをみることを試みる。

教育に関しては, 男女ともに本人の教育年数をそのまま用いている。出身学校をなんらかの基準で (たとえば, 入学難易度など) 分けるということは, 本稿ではこころみしていない。実際, 教育のライフスタイルへの効果は存在しないか, 弱いものであった。

ライフスタイルに関しては, 生き方に関する5つの質問をもとに分析を行うこととした。探索的因子分析を用いて検討した結果, 5つの質問項目のうちで, 「自

分の仕事のために家庭や私生活を犠牲にしていることが多い」と、他の4つの項目「仕事・家庭のほかに、心のよりどころとなるようなライフワークや趣味をもっている」、「将来のために節約・努力するよりも、今の自分の人生を楽しむようにしている」、「人とのかきあいや人間関係を幅広くするようにしている」、「センスのよい趣味や振るまいに心がけている」の2つの因子に分れたので、それぞれの因子を、後者を私的ライフスタイル、前者を公的ライフスタイルとして、後の分析で用いる。

正統文化に関しては、文化的活動の中から、「クラシック音楽の音楽会・コンサートへ行く」、「美術展や博物館に行く」、「歌舞伎や能や文楽を見に行く」、「華道・茶道・書道をする」、「短歌や俳句を作る」、「小説や歴史の本を読む」の6項目で測定している。

外生変数としては、きょうだい数、年齢、義務教育終了地の人口の自然対数、15歳時の家庭における所有財、現在同居している家族人数の5変数を用いた。ここで、義務教育終了地人口は、回答者が卒業時に居住していた自治体の人口を用いた。具体的には、全国市町村要覧に掲載されている国勢調査の人口を用いた。この場合、正確には義務教育終了時点での正確な市町村の人口というよりも、卒業時点にもっとも近い国勢調査のデータが用いられている。15歳時所有財については、14項目についてもっていた場合を1、なかった場合をゼロとした総和で定義する。なお、各項目は、持家、自家風呂、ラジオ、テレビ、冷蔵庫、自転車、自動車、ピアノ、電話、応接セット、文学全集・図鑑、株券または債券、美術品・骨董品、別荘である。

4. 幼少時文化資本

「三つ子の魂百までも」というように、子供のころに身につく、えられた経験や知識、考え方などは、成人となってからの行動や習慣などに影響を及ぼすと考えられる。とりわけ、幼少期に身につけた文化的環境での経験は、成長してからも消えることのない効果をもっている。よくいわれるような、「どこそこの生まれはさすが違う」というのは、血筋がどうこうというよりも、育った文化的な環境がその子が長じててもなお効果をもつことを示している。つまり、生物学的な要因よりも、社会的な要因が重要である。また、よい文化的環境に生まれた者にとってはなんでもないことが、他の者にとっては身につけることがすこぶる重荷となるのである。

本節での分析において、子供のころの文化的環境についての3つの質問、「子供のころ、家族の誰かがあなたに本を読んでくれましたか」、「小学生のころ、家でクラシックレコードをきいたり、家族とクラシック音楽のコンサートに行ったことがありましたか」、「小学生の頃、家族につれられて美術館や博物館に行ったことがありましたか」のスコアを単純に足した得点を、幼少時文化資本の得点とする。

幼少時文化資本の形成において、男性と女性とでは一つ大きな違いがみられる。それは、男性においては、都鄙度の影響が強く見られることである。すなわち、男性においては文化資本の形成において、社会の環境が都会的であるほど文化資本の形成にプラスに働くことがみられる。そして、教育にも影響を与える。

回帰分析でこのことを確かめた結果は、表1のようになった。母の教育が強い効果をもっていることは注目に値する。同様に、表1から男性は年齢が高いほど

表1. 幼少時文化資本の回帰分析（男性）

変 数	B	β	T	Prob > T
Intercept	2.590	0.000	6.044	0.0001
本人年齢	-0.018	-0.119	-3.382	0.0008
義務教育終了地人口	7.232 E-8	0.076	2.541	0.0112
父教育年数	0.093	0.152	3.177	0.0015
母教育年数	0.145	0.181	3.664	0.0003
父主職威信	0.028	0.170	4.706	0.0001
R ²	0.250			
Adj R ²	0.246			

表 2. 幼少時文化資本の回帰分析 (女性)

変 数	B	β	T	Prob > T
Intercept	1.678	0.000	3.442	0.0006
本人年齢	-0.012	-0.068	-2.013	0.0444
義務教育終了地人口	6.229 E-8	0.053	1.925	0.0546
父教育年数	0.224	0.309	7.154	0.0001
母教育年数	0.153	0.162	3.775	0.0002
父主職威信	0.024	0.121	3.633	0.0003
R ²	0.316			
Adj R ²	0.312			

幼少時文化資本が低いことが読み取れる。また、表 2 から女性についてもそのような傾向がみられる。義務教育をどのような環境で受けたかは、都市的な場合ほど将来高い教育を受ける可能性が高かったことを意味する。

表 3 からは、男性の教育に母親の教育が効果を持た

ないことが見て取れる。母親の影響は、幼少時文化資本に吸収されてしまうといってもよいかもしれない。

ところが対照的に、女性においてはこの効果は存在しない。表 4 から女性にとって、義務教育終了時に住んでいた自治体の人口規模は他の教育年数に貢献しないことが見て取れる。女性にとって教育機会は、父親

表 3. 本人教育年数の回帰分析 (男性)

変 数	B	β	T	Prob > T
Intercept	10.246	0.000	19.134	0.0001
幼少時文化資本	0.125	0.094	2.992	0.0029
本人年齢	-0.056	-0.277	-8.482	0.0001
義務教育終了地人口	0.161 E-7	0.127	4.603	0.0001
父教育年数	0.115	0.141	3.183	0.0015
母教育年数	0.065	0.061	1.339	0.1811
父主職威信	0.054	0.244	7.265	0.0001
R ²	0.368			
Adj R ²	0.363			

表 4. 本人教育年数の回帰分析 (女性)

変 数	B	β	T	Prob > T
Intercept	10.807	0.000	26.314	0.0001
幼少時文化資本	0.126	0.137	4.630	0.0001
本人年齢	-0.062	-0.377	-12.288	0.0001
義務教育終了地人口	3.191 E-8	0.029	1.175	0.2401
父教育年数	0.045	0.067	1.668	0.0956
母教育年数	0.114	0.130	3.330	0.0009
父主職威信	0.036	0.195	6.398	0.0001
R ²	0.441			
Adj R ²	0.438			

の教育年数によっても弱い影響しか受けない。もっぱら母親の教育年数からの影響が大きいと言わざるをえない。父親の教育年数は有意な効果をもたない。社会階層以外のライフチャンスないし機会構造がもたらすものが男性と違っているのか興味深いところである。

幼少期文化資本がどのような形でライフスタイルや正統文化に影響を与えるのか。この謎を解くのがこの研究の課題の一つである。また、到達階層はどのような意味をもつのかを明らかにする。

5. 男性の文化的再生産における ライフスタイルの機能

ライフスタイルは、どのように文化的活動、ここでは正統文化とかかわりをもつのであろうか。この間に答えるためには、まず、ライフスタイルについてどのように考えるかを示す必要がある。ここでは、ライフスタイルは生き方ないし志向といってよい。ところで、幼少時文化資本は家庭における文化的環境の結果形成されるものであり、ブルデューの言葉では相続文化資本に相当する。ここで相続としなかったのは、この言葉が誤解を与えることを避けるためである。幼少時文化資本は、ものとしての客体化された文化資本と、身体化された文化資本の2つが主な存在形態である。ここでの用いた質問からして、幼少時文化資本はものではありえぬから、身体化された文化資本にほかならない。身体化がなじみにくいならば、たとえていえば、いわば「細胞化」したものといってもよい³⁾。要するに、血となり肉となって、自然に身についた文化資本であることが重要なのである。

図1はこれまでの予備的考察をもとに、LISRELのフルモデルによって変数間の因果的順序の考察を行い、男性について採択したモデルである。図1の中では、潜在変数(概念)名を四角で囲んで表示した。また、外生変数は、図の中に変数名だけで示した。各潜在変数の指標は、表5に示した。モデルの適合は、RGFI=0.95、RAGFI=0.92と大きなモデルとして充分許容できるものである⁴⁾。図1では、概念と外生変数のみを示している。各概念の指標の係数に関しては、後に示す女性に関する図2の係数と共に表5に示した。

男性の出身階層の高さには、きょうだい数がマイナスの規定要因となっている。これは、調査対象者の定位家族(family of orientation)におけるきょうだい数であるから、大家族であるほど階層上の位置が低い

表5. 各概念の負荷量

概 念	変 数	男性	女性
出身階層	父教育	.800	.800
	父職威信	.482	.425
	母教育	.929	.862
幼少時文化資本	家族が本	.612	.685
	クラシック音楽	.671	.784
	美術展博物館	.901	.867
教育	教育年数	.984	.972
到達階層	職業威信	.759	.359
	年収	.577	.448
	所有財	.469	.626
	自律性	.275	
公的ライフスタイル	犠牲	1.000	
私的ライフスタイル	ライフワーク趣味	.801	.750
	今を楽しむ	.346	.218
	広い人間関係	.331	.375
	センスのよい趣味	.460	.463
正統文化	クラシック音楽	.397	.663
	美術展博物館	.590	.751
	歌舞伎能文学	.568	.598
	華道茶道書道	.355	.539
	短歌俳句	.627	.431
	小説歴史の本	.581	.443

注 数字は標準化値。各概念の指標はスケーリングに用いた1番目の指標以外はすべて有意。誤差相関は省略。

ことを意味している。いいかえれば、小規模の定位家族ほど社会移動上は有利であることを示している。また、年齢の効果がマイナスであるのは、職業構造、産業構造の変化によって、職業の全体的傘上げができたからだと考えられる。義務教育終了地の人口は、ここでは出生・生育地の人口の代理変数として用いている。なぜならば、単身赴任等を除くと義務教育までは子供は親と一緒に生活することが一般的だといえるからである。この変数が出身階層をプラスに規定しているのは、都市的であるほど父母の教育機会や、昇進機会も豊富であるといえるからである。すなわち、都市的であるほど機会構造にめぐまれることを意味する。

さて、出身階層は幼少時文化資本の正の規定要因となっている。標準化された値で0.512である。出身階

図1. 男性のライフスタイルと文化的再生産 (最尤推定標準化解)

$$\chi^2 = 1633.0 \quad df = 287 \quad \chi^2/df = 5.69$$

$$RGFI = 0.95 \quad RAGFI = 0.92 \quad N = 670$$

注 各概念の指標の係数は表5を参照。概念間の関係を示す数字は太字にした。有意でないパスはゼロに固定した。ただし破線の矢印部分のみ有意でない。

層は、教育をも正に規定するが、幼少時文化資本へのパラメータ値と比べて、0.222対0.512で、およそ2分の1である。このことは、出身階層の効果は、時間的にもあまり隔たっていない幼少時文化資本のほうに強い効果をもつことを示す。

年齢は幼少時文化資本に対してマイナスの規定要因となっている。これも日本の社会全体が生活文化の向上の恩恵に浴していることを示しているとも考えられる。時代とともに生活は豊かになってきたからである。義務教育終了地の人口は、幼少時文化資本の正の規定要因となっている。これも都市人口規模による機会構造のなせるわざといえる。Blauは、アメリカの125の標準大都市統計地区(Standard Metropolitan Statistical Areas; SMSAs)のデータをもとに文化の供給側の要因を分析した(Blau, 1989)。それによれば、都市人口規模による機会の差は確実に存在する。たとえば、博物館や美術館へ行く機会は都会ほど大きい。このように義務教育終了地の人口は、一種の機会構造を表す変数である(Bourdieu, 1979[1997])。

図1において幼少時文化資本は、教育、到達階層、私的ライフスタイル、正統文化へそれぞれ直接の正の規

定要因となっている。標準化解でのパラメータの推定値は、それぞれ、0.107, 0.183, 0.263, 0.392であった。

幼少時文化資本の教育への効果について、出身階層からの効果0.222に近い効果をもっている。幼少時に形成された幅広い読書、知識、体験の好みは、いわば、「大きな勉強」として、単なる知識のための知識、点数を上げるための知識と異なり、意識的な努力を待たずして身についたものといえる。点数を上げるためだけの「小さな勉強」は、自然さないし必然性が子供の中から出てきているとはいいいにくい。それゆえ、幼少時文化資本が重要な教育達成の経路の1つであることは確かである。つまり、学校教育において修得が必要とされる知識や文化を身につけることは、幼少時文化資本が豊かであるほど、スムーズで自然なものとなる。そうでない者にとっては、学校教育において困難にぶつかることがしばしば見られる。

また、幼少時文化資本の私的ライフスタイルへの効果は次のように解釈することができる。幼少時に形成された文化資本は、身体化されたかたちで現在の私的ライフスタイルにまで影響をもたらす。この点では、教

育への経路の効果とよく似ているといえる。

さらに、幼少時文化資本の正統文化への直接の効果も同じように考えることができる。幼少時に形成された幅広い読書、知識、体験や好みは、成人後の現在の正統文化活動を規定する基盤を与えているといえよう。

このほかに、幼少時文化資本は直接に到達階層への効果をもっている。幼少時に形成され、身体化された文化資本をもつことは、現在の所属階層に到達する際の促進要因である。これは男性においては、出身階層が直接に現到達階層を規定するのではなく、幼少時文化資本として身体化された行動様式や好みなどに応じて、到達階層も高くなると考えられる。また、到達階層の高さに応じて行動様式や好みが必要とされるとみることでもある。そして、それは学校教育だけでは身につかず、出身家庭での文化資本に依存するのである。

教育を見てみよう。教育は定位家族においてきょうだい数が多いとマイナスの要因として機能する。人的資本論的には、きょうだいが多いと子供一人にさけるコストが小さくなるからと見ることができよう(Becker, 1981)。また、義務教育終了地人口は、具体的には、都市度として表れるといえる。この意味で、より高い教育の機会が都市度の高いところに存在するということを示す。また、15歳時の所有財は物的に教育達成を側面から支援する効果をもつ。

教育は、到達階層および正統文化を規定する要因となっている。とりわけ、到達階層へは強い規定力をもっている。人的資本論が主張するように、教育が高いほど到達階層も確かに高くなる。また、正統文化は、出身家庭で形成される幼少時文化資本をたどらない経路、すなわち、学校教育からの経路を確保しているといえる(0.301)。学校の理想の一つとして考えられた平等化機能は、少なくとも、正統文化に関する教育の効果には表れているといえる。教育を受けるほどに正統文化活動は促進されるからである。家庭が恵まれていない者であっても、出身階層→教育→正統文化という経路が存在する。このことは、学校の社会的意義の一つである。

私的ライフスタイル、つまり、豊かで楽しみのある生活のスタイルは、家族人数が多いほど享受することが難しい。ここでの家族人数は基本的に現在同居している人数である。社会移動に関する社会毛管現象説のように⁹⁾、私的生活の側面においても、豊かな生活のためには家族は小さいほどよいともいえる。

私的ライフスタイルは、正統文化への直接の効果をもつ(0.353)。この効果は、豊かな私的生活での生き方が正統文化活動を育むことの証明でもある。幼少時文化資本からの直接的効果(0.392)と比べても、私的ライフスタイルを通して、いわば、変換された効果は少し小さいけれども有意なものである。

したがって、図1の潜在変数(概念)は、左側の幼少時文化資本、私的ライフスタイル、正統文化の流れと、右側の教育、到達階層、正統文化、(公的生活ライフスタイル)の流れとに、2つに分けることができる。とくに、左側の流れは、ライフスタイルないしハビトゥスの伝わる経路であると見れる。すなわち、ここで注目に値するのは、私的ライフスタイルが到達階層の帰結として現れるのではなく、幼い頃からの文化資本の影響上にあるということである。要するに、図1の左側の流れは、文化資本の形態でいうならば、身体化された形で文化的再生産のルートであるといえる。

他方、図1の右側のルートは、出身階層から学歴、到達階層、正統文化へ至る「対応原理」、ないしは人的資本論的、または機能的必要性によるルートであるといえる。

到達階層は、年齢が高いほど、また、きょうだい数が少ないほど高い。また、到達階層が高いと正統文化活動をする可能性が高くなる。到達階層から公的生活ライフスタイルへの経路は小さい効果をもつ。年齢からの効果は有意ではない。仕事のために生活を犠牲にすることは、ある限られた範囲で生じていることであろう。少なくとも、今回のSSM調査で見限りは、かつてほどの日本人の「モーレツ」ぶりは影をひそめているといえよう。

6. 女性における文化的再生産とライフスタイル

女性についての結果は男性と異なる。図2からも見て取れるように、より複雑な形をしている。適合度は、 $RGFI=0.91$ 、 $RAGFI=0.84$ でモデルの大きさからすると適合はよい。なお、すでに各概念の指標の係数については、表5で男性との比較のために示してある。

ここで、潜在変数間の経路を見ると、出身階層から到達階層への直接の経路が存在する。すでに述べたように、ここでは女性の到達階層について「地位分モデル」を採用した。つまり、表5の到達階層の指標には、女性有配偶者については夫のものを使用している。

図2. 女性のライフスタイルと文化的再生産 (最尤推定標準化解)

$$\chi^2 = 1251.7 \quad df = 232 \quad \chi^2/df = 5.40$$

$$R^2 = 0.90 \quad RAGFI = 0.86 \quad N = 721$$

注 +は10%で、他はすべて5%で有意。概念間の関係を示す数字は太字にした。有意でないパスはゼロに固定。各概念の指標の係数は表5を参照。

図2が示すように、女性の出身階層は、到達階層を直接に規定するほど強いものである。男性においては、一度、教育を経由することによって、現在の到達階層に至る。これに対して、女性は直接ルートが存在する。男性とは異なり、結婚を重視する女性の生き方が登場するのは当然のことといえる。この意味で女性にとって、結婚はSF映画や小説に出てくるような地位移動の一種の「ワープ」のルートである。また、このことを男性側から見れば、配偶者選択の際、相手の女性の出身階層を重視しているのだといえるだろう。

男性と異なり女性の場合、到達階層から私的ライフスタイルへの直接の経路が存在する。これは、必ずしも強いものではないが、図2を図1と比べると女性の場合には、私的ライフスタイルが到達階層によって規定されているという違いがある。つまり、女性では到達階層の影響、具体的には主に夫の影響を受けて、私的ライフスタイルが決まってくる。男性では、私的ライフスタイルが到達階層の直接的な影響を受けないことが特徴であり、幼少時文化資本を通して規定されているだけである。

表6. 男性の標準化全効果

	出身階層	幼少期文化資本	教育	到達階層	私的ライフスタイル
幼少期文化資本	.512	—	—	—	—
教育	.276	.107	—	—	—
到達階層	.240	.239	.530	—	—
公的ライフスタイル	.043	.043	.095	.178	—
私的ライフスタイル	.135	.263	—	—	—
正統文化	.394	.579	.440	.261	.353

表7. 女性の標準化全効果

	出身階層	幼少期文化資本	教育	到達階層	私的ライフスタイル
幼少期文化資本	.623	—	—	—	—
教 育	.261	.134	—	—	—
到達階層	.368	.047	.349	—	—
私的ライフスタイル	.295	.401	.046	.132	—
正統文化	.452	.462	.300	.401	.492

また、男性と異なるのは、図2で幼少時文化資本に年齢の効果が見られないことである。他方、私的ライフスタイルには年齢の効果が見られる。家族のエンベティ・ネスト期に対応するように、ゆとりが加齢とともに増すのであろう。これは、正統文化についても同様だといえよう。図1と比較したとき、女性はより家庭にしばられているともいうことができよう。

図1と図2を見比べたとき、女性は到達階層の意味が男性と異なることが特徴的である。女性にとって到達階層は、男性とは異なる地位達成ルートの存在を意味し、さらに到達階層はライフスタイルや正統文化活動を規定している。図1について、左側のルートと右側のルートが存在することを述べたが、女性では図2から見てとれるように、配偶者選択をともなう右側のルートがかなり強力に存在する。もちろん、このような男女差が存在する限りでは、家庭における夫婦を単位としてみれば、男女はともに相補的な関係にある。男性が地位達成を、女性がその結果として、日常生活での充実を図れるような関係だともいえる。

このことは、全効果に関する表7からも明らかである。標準化された全効果でみると、女性は出身階層から私的ライフスタイルおよび正統文化への効果が、それぞれ、0.295、0.452と圧倒的である。これに対して、男性では、表6に示すように、幼少時文化資本からの正統文化への全効果が、0.579と、出身階層の全効果0.394よりも大きい。同様に、私的ライフスタイルに対する効果では、出身階層の効果0.295より幼少時文化資本の効果(0.401)のほうが、大きいのである。

また、注目に値するのは男性では、正統文化活動への教育の規定力が0.440と大きいのに対し、女性では0.300とさほど大きくないことである。

到達階層から正統文化への全効果では、男性は0.261と小さめであり、女性では0.401と小さくはない。女性の正統文化活動における到達階層のもつ意味が大きいことがここからも見てとれる。

7. 結 論

ライフスタイルを取り上げることによって、文化的再生産の構造が明らかにされた。そこで重要な位置を占めたのは、ライフスタイルや身体化された文化資本だということである。生きかた、生きていく上での習慣、つまり、身体化されたものが文化的再生産の重要な要因であるといえる。文化的再生産で伝えられるのは、ハビトゥスであるといってもよい。そして、このことはライフスタイルを考えてはじめて明らかになったことである。男性は、出身階層から教育、到達階層へと至る経路が正統文化活動を行う上でより重要な経路であった。女性では、出身階層から幼少時文化資本、私的ライフスタイルへを経て正統文化に至る経路が重要になる。本研究における中核的プロセスは、ライフスタイルまたはハビトゥスの再生産であった。より詳しい分析は今後の課題である。

注

1) たとえば、Stinchcombeによれば、Mertonの社会学の特徴は、構造的にパターン化された選択肢からの選択としてみなすことができる(Stinchcombe, 1990)。このことがMertonの理論が文化やライフスタイルに関わる経験的研究において使われることの多い理由でもある。

2) 汎用的統計パッケージによっても、多分(ポリコリック)相関係数などを求めることもできる。たとえば、SASでは2つの方法がある。第1の方法としては、PROC FREQのなかでオプションPLCORRを追加指定することで相関を計算できる。第2の方法としては、マクロ%POLYCHORで相関行列を計算できる。これは、SAS社のWWWのサイト上で公開されているPOLYCHOR。SASをダウンロードすればよい。なお、PRELIS2では、連続変数と多分法的属性と

の相関を表すものとして、多列 (ポリシリアル) 相関係数 (polyserial correlation coefficient) が計算できる。

3) ナポレオンを敗退させたウエリントン将軍によると、「習慣は第2の天性どころではない。それどころか、天性の十倍も強力なものだ」と言ったことが知られているが、その位強く人間を規定するようになってくるという意味である。

4) 適合度に関して、Jöreskog and Sörbom (1981) は、GFI や AGFI が標本数の関数ではないと主張していたが、すでにモンテ・カルロ実験によってこの主張は疑問視されていた。近年、Maiti and Mukherjee (1990) によって分布特性が統計学的に示されるに至り、Jöreskog らの説は否定されるに至った。それによれば、GFI の期待値 EGFI は、指標数が増加するにつれて減少し、他方、標本数が増加するにつれて、EGFI は増加する。Sharma (1996) は、RGFI=GFI/EGFI および EAGFI=AGFI/RAGFI の値が、それぞれ、0.90 および 0.80 をこえた場合をモデルの採用の目安としている。ここでもこの方法にしたがっている。古くから社会学の実証研究では指標数が多い大きなモデルにおいて、 χ^2/df の値が7 ぐらいのものが使われるのは普通である (cf Kohn and Slomczynski, 1990)。この点については、Bollen (1989; 278), Mueller (1996; 84) なども参照されたい。

5) A. Dumont の説で、毛管現象と同じように「社会の梯子を昇るためには、家族の大きさは小さくなければならない」(安田, 1971) というものである。

参 考 文 献

- Becker, G. (1981). *A Treatise on the Family*. Harvard University Press.
- Blau, J. (1989). *The Shape of Culture: A Study of Contemporary Cultural Patterns in the United States*. Cambridge University Press.
- Blau, P.M. (1994). *Structural Contexts of Opportunities*. University of Chicago Press.
- Bollen, K.A. (1989). *Structural Equations with Latent Variables*. John Wiley and Sons.
- Bourdieu, P., & Jean C.P. (1964). *Les heritiers*. Minuit. (石井洋二郎訳 (1997). 遺産相続者たち. 藤原書店.)
- Bourdieu, P. (1979). *La distinction: Critique sociale du judgement*. Minuit. (石井洋二郎訳 (1990). ディスタンス I, II. 藤原書店.)
- Bourdieu, P., & Jean, C.P. (1979). *La reproduction*. (translated by Richard Nice. (1990). *Reproduction in Education, Society and Culture*. 2nd ed., Sage. 宮島 喬訳 (1991). 再生産. 藤原書店.)
- DiMaggio, P. (1982). Cultural Capital and School Success: The Impact of Status Culture Participation on the Grades of U.S. High School Students. *American Sociological Review*, **47**, 189-201.
- DiMaggio, P., & John, M. (1991). Cultural Capital, Educational Attainment, and Marital Selection. *American Journal of Sociology*, **90**, 1231-1261.
- Giddens, A. (1991). *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Polity Press.
- Hendry, L.B., Jane, S., Love, J.G., & Glendinning, A. (1993). *Young People's Leisure and Lifestyles*. Routledge.
- Jöreskog, K.G., & Dag, S. (1979). *Advances in Factor Analysis and Structural Equation Models*. Abt Books.
- Jöreskog, K.G., & Dag, S. (1984). *LISREL VI: Analysis of Linear Structural Relationships by the Method of Maximum Likelihood*. 3rd. ed. Scientific Software.
- Jöreskog, K.G., & Dag, S. (1993). *LISREL 8 User's Reference Guide*. Scientific Software.
- 片岡栄美 (1992). 社会階層と文化的再生産。理論と方法, **7**(1), 33-55.
- 片岡栄美 (1996a). ジェンダーにおけるハビトゥスと資本。宮崎和夫・米川英樹編。社会と教育への視点。創森出版。143-166.
- 片岡栄美 (1996b). 階級のハビトゥスとしての文化弁別力とその社会的構成。理論と方法, **11**(1), 1-20.
- Kohn, M., & Slomczynski, K.M. (1990). *Social Structure and Self-Direction: A Comparative Analysis of the United States and Poland*. Basil Blackwell.
- Maiti, S.S., & Mukherjee, B.N. (1990). "A Note on Distributional Properties of the Jöreskog and Sörbom Fit Indices." *Psychometrika*, **55**, 721-726.
- Mueller, R.O. (1996). *Basic Principles of Structural Equation Modeling*. Springer-Verlag.
- 直井道子 (1989). 女性の階層帰属意識—女性の地位の借用モデルと独立モデル—, 1985 年社会階層と社会移動全国調査委員会編。女性と社会階層, 157-178.
- Sharma, S. (1996). *Applied Multivariate Techniques*. John Wiley and Sons.
- 白倉幸男 (1991). LISREL: リズレルモデル。三宅一郎・山本嘉一郎・垂水共之・白倉幸男・小野寺孝義, 新版 SPSS-XIII 解析編 2. 東洋経済新報社, 223-310.
- 白倉幸男 (1993). 社会階層と自立および知的柔軟

性、直井 優・盛山和夫・間々田孝夫(編)、日本
社会の新潮流、東京大学出版会、121-153。
Stinchcombe, A.S. (1990). Social Structure in the
Work of Robert Merton. in John, C., Celia, M.,

& Sohan, M. (Eds.) *Robert K. Merton : Con-
sensus and Controversy*. Falmer Press.
安田三郎 (1971). 社会移動の研究、東京大学出版会。
—1997 年 4 月 5 日受付—